



平成20年10月24日

南極観測船「しらせ」後利用に関する検討結果について

南極地域観測統合推進本部（本部長：塩谷立文部科学大臣）では、同本部の下に「しらせ」後利用に関する検討委員会（委員長：野本敏治財団法人溶接接合工学振興会理事長）（以下「委員会」という。）を設置して、南極観測船「しらせ」の後利用について鋭意検討を行ってまいりましたが、このたび、委員会における検討を踏まえ、「しらせ」の保存活用は不可能であるとの判断に至ったことから、解体条件付き払下げとすることとなりました。

今後、「しらせ」は、防衛省において払下げに向けた手続きを進めることとなります。

なお、「しらせ」の船体部品の一部につきましては、メモリアルとして保存・活用を図る予定としております。

1. 検討の経緯及び結果

- 委員会は、7月30日以降、計4回の会議を開催。後利用希望者（企業等4者）に対して、「しらせ」の具体的な利用計画の提出を要請し、以下の2者から提出された「しらせ」利用計画に基づき、利用目的、管理方法、資金計画等の観点から評価を実施。両者とも不選定との結論。
 - ・ 南極観測船「しらせ」誘致実行委員会（大阪府大阪市）
 - ・ 株式会社大柿産業を代表とするグループ（広島県江田島市）
- 委員会での結論を踏まえ、本日、南極地域観測統合推進本部連絡会において、「しらせ」の保存活用については不可能であると判断し、解体条件付き払下げを決定。

2. 委員会における評価概要

- 提出された「しらせ」の後利用計画の内容を詳細に検討し、確認が必要な事項について回答を依頼。後利用計画のプレゼンテーション及び委員会委員との質疑応答を実施。再確認が必要な事項について改めて回答を依頼。

- 再確認事項への回答を踏まえ、選定候補のうち最上位となった後利用計画について、当該計画の実現性等を確認する観点から現地調査を実施。現地調査において確認された事項をも踏まえ、計画全体を俯瞰して最終的に評価。
- 「南極観測船「しらせ」誘致実行委員会」及び「株式会社大柿産業を代表とするグループ」双方とも、資料作成や確認事項への回答などに精力的に対応。地元への思いや愛情、地元代表としての気概、「しらせ」誘致に向けての熱意等については高く評価。一方、利用計画の練度、収支計画などの資金面、係留の安全性などの技術面、維持管理を含めた事業の継続性等に懸念があり、結果として不選定との結論。

3. 委員会名簿

- 「しらせ」後利用に関する検討委員会（五十音順）

	大 津 皓 平	東京海洋大学先端科学技術センター特任教授
	北 川 弘 光	元北海道大学大学院工学研究科教授
	小 堀 信 幸	財団法人日本海事科学振興財団船の科学館学芸部長
	鈴 木 清	鈴木公認会計士事務所
	富 田 康 光	京都職業能力開発短期大学校長
	内 藤 靖 彦	国立極地研究所名誉教授
委員長	野 本 敏 治	財団法人溶接接合工学振興会理事長
	兵 藤 裕	ユニバーサル造船株式会社艦船・特機事業本部 京浜事業所長(執行役員)
	堀 由紀子	株式会社江ノ島マリンコーポレーション 代表取締役会長

南極地域観測統合推進本部

<本件に関する照会先>

文部科学省研究開発局海洋地球課

電話：03-5253-4111（内線4460、4144）

防衛省人事教育局人材育成課

電話：03-3268-3111（内線20683）

<「しらせ」の売払い等に関すること>

防衛省経理装備局艦船武器課

電話：03-3268-3111（内線21012）

参 考 資 料

南極観測船「しらせ」の後利用に係る検討経緯	4
南極観測船「しらせ」の就役・退役	5
南極観測船「しらせ」の概要	6
昭和58年度から平成19年度までの実績	7
南極観測船「しらせ」の活躍（救難活動）	8

南極観測船「しらせ」の後利用に係る検討経緯

1. 後利用の検討

- 平成19年6月の南極地域観測統合推進本部（以下「南極本部」という。）総会において、「しらせ」の今後については、「宗谷」、「ふじ」と同様に国民、特に青少年の南極観測に対する関心と理解の増進に役立つ形で展示保存される可能性について、以下の順序で検討することとされた。
 - ① 国の機関に所管換えの照会
 - ② 都道府県等に対する利用の有無の照会
 - ③ 解体条件付き払下げ

- 平成19年11月の南極本部総会において、解体条件付き払下げとなる場合、船体部品の一部をメモリアルとして保存することを検討することとされた。

2. 後利用計画募集の結果

- 平成19年7月に国の機関に所管換えの照会を行ったが希望なし。
- 平成19年9月に都道府県（管下の関係団体を含む。）に利用の有無を照会したが希望なし。
- 平成20年4月から5月にかけて、一般に対して後利用に関する計画の概要を募集。企業等から7件の提出。7月末までにそのうちの3件が取下げ。
「しらせ」後利用に関する検討委員会における検討。2者が「しらせ」利用計画を提出。

「しらせ」の就役・退役

「しらせ」は昭和56年3月5日起工、12月11日進水式を迎え、昭和57年11月12日竣工し防衛庁（当時）に引き渡され就役した。1年間の試験・訓練航海などを実施した後、昭和58年11月14日に第25次南極地域観測隊をのせて南極観測支援行動の処女航海に出発した。

基準排水量11,600トンは「ふじ」（5,250トン）の約2倍である。3軸ディーゼル電気推進式で、軸馬力3万馬力、航続距離2万5千マイル、貨物積載輸送量最大1,000トンで、厚さ1.5mの定着氷を3ノットで連続砕氷が可能である。輸送用ヘリコプター2機は従来どおりS-61Aが搭載された。

「しらせ」の高い輸送及び行動能力を活用して、基地の拡充、それによって可能となる大型設備や大電力を必要とする基地観測の高度化、内陸奥地での氷床深層掘削のための拠点建設と維持、昭和基地とは別個に運営される内陸セールロンダーネ山地調査のための基地建設（あすか基地）などが実施され、我が国の南極観測に大きな転機をもたらした。

「しらせ」は昭和58年度以降25回にわたり南極行を果たした。しかし、厳しい南極氷海での奮闘により老朽化が進み、第49次隊の25回目の南極行動でその使命を終えることになり、平成20年7月30日に退役した。

南極観測船「しらせ」の概要

基準排水量	11,600トン
主要寸法	全長134m×最大幅28m ×甲板からの深さ14.5m
速力	巡航:15ノット
機関形式(軸数)	ディーゼル電気推進(3軸) 主機×6機
軸馬力	30,000馬力
砕氷能力	連続砕氷航行可能氷厚1.5m
航空	輸送用ヘリコプター2機
乗員	乗組員:約170名、 観測隊員等:約60名



昭和58年度から平成19年度までの実績
 (第25次) (第49次)

項 目	実 績
総行動日数	3,803日
総航程	約543,500海里 (注1)
総チャージング回数 (注2)	36,650回
輸送人員	1,447名
総輸送物資量	約23,900トン
総持ち帰り物資量	約5,050トン

(注1) 1海里：1,852メートル

(注2) チャージング：氷厚約1.5メートル以上の氷は一旦艦を200～300メートル後退させ、最大馬力で前進し、氷に体当たりするとともに氷に乗り上げる格好で氷を砕く。

南極観測船「しらせ」の活躍（救難活動）

○第 27 次

1985（昭和 60）年 12 月 3～14 日

エンダビーランド沖合で、オーストラリア観測船ネラダン号救出。



ネラダン救出のため、「しらせ」に飛来したソレンセン船長らと協議する村山本部委員・倉田艦長・吉田隊長



ネラダン号救出

○第 40 次

1998（平成 10）年 12 月 12～18 日

プリッツ湾で、オーストラリア観測船オーロラオーストラリス号救出。



「しらせ」は、1998 年 12 月プロペラ故障のためプリッツ湾で立ち往生していたオーロラオーストラリス号の解放に成功。

○第 44 次

2003（平成 15）年 3 月 31 日～ 4 月 2 日

オーストラリア海上救難調整センターから、消息不明のヨット、マッドマックス号に関する情報。パプアニューギニア・ロッセル島海上で、座礁したヨットを発見。搭載ヘリを発艦させ、乗員 2 人を救出。

○第 48 次

2006（平成 18）年 12 月 28～29 日

ケープタウン海上救難調整センターから医療支援要請。昭和基地沖約 300 マイルで、スペイン漁船 T I P H O O N - I 号の乗組員に対する医療支援を実施。



T I P H O O N - I 号












医療支援。患者の様態は安定。






○第 49 次国内訓練

2007（平成 19）年 8 月 20 日

千葉県館山市北条海岸沖 2 キロ付近で浮き輪にしがみついている男子高校生 2 人を発見し作業艇で救助。

(参考) 「しらせ」メモリアルリスト

番号	品名等	数量	単位	備考
1	経線儀	1	台	
2	星球儀	1	台	
3	救命艇用油燈	1	台	
4	救命艇用磁気コンパス	1	台	
5	内火艇号鐘	1	個	
6	引き船燈	1	台	
7	傾斜計	1	台	
8	自記気圧計	1	台	
9	予備主錨	1	個	
10	製造銘板	1	個	
11	艦名看板	1	個	

12	号鐘	1	個	
13	磁気コンパス	1	個	
14	予備スクリュー・ブレード	8	枚	
15	表彰盾、記念盾 (内閣総理大臣賞盾及び防衛庁長官1級賞状盾 2枚) (各寄港地、団体、他艦船 盾約130枚)	1	式	
16	写真、絵画等 (写真「オーロラ・オーストラリス救援」) (絵画「オーロラ・オーストラリス」) (絵画「しらせ」 作者 わたせのぶあき) (油絵「しらせ氷海を行く」 作者 石井弥太郎) (絵画「しらせ氷海を行く」 作者 渡辺津奈) (写真「シドニー停泊中のしらせ」) (オブジェ「南極大陸」) (水彩画) (水彩画)	1	式	
17	表彰状、感謝状 (豪観測船オーロラ・オーストラリス救援感謝状 等)	11	枚	

平成 21 年度南極地域観測事業関係概算要求の概要

※カッコ内は前年度予算額

○南極地域観測事業費 68 億円(47 億円)

観測隊員経費、観測経費や、物資等を輸送するための経費及び次期南極輸送支援機（ヘリコプター 1 号機及び 2 号機）の整備を行う。

- ・ 南極観測事業の推進 26 億円(18 億円)
- ・ 次期南極輸送支援機（2 号機）及び整備用部品の整備 42 億円(29 億円)

○南極地域観測船建造費 101 億円(98 億円)

平成 19 年度の輸送支援を最後に退役を迎えた初代「しらせ」を後継する新南極観測船「しらせ」の建造を行う。(完成・就航は平成 21 年度を予定)

合 計 169 億円(145 億円)